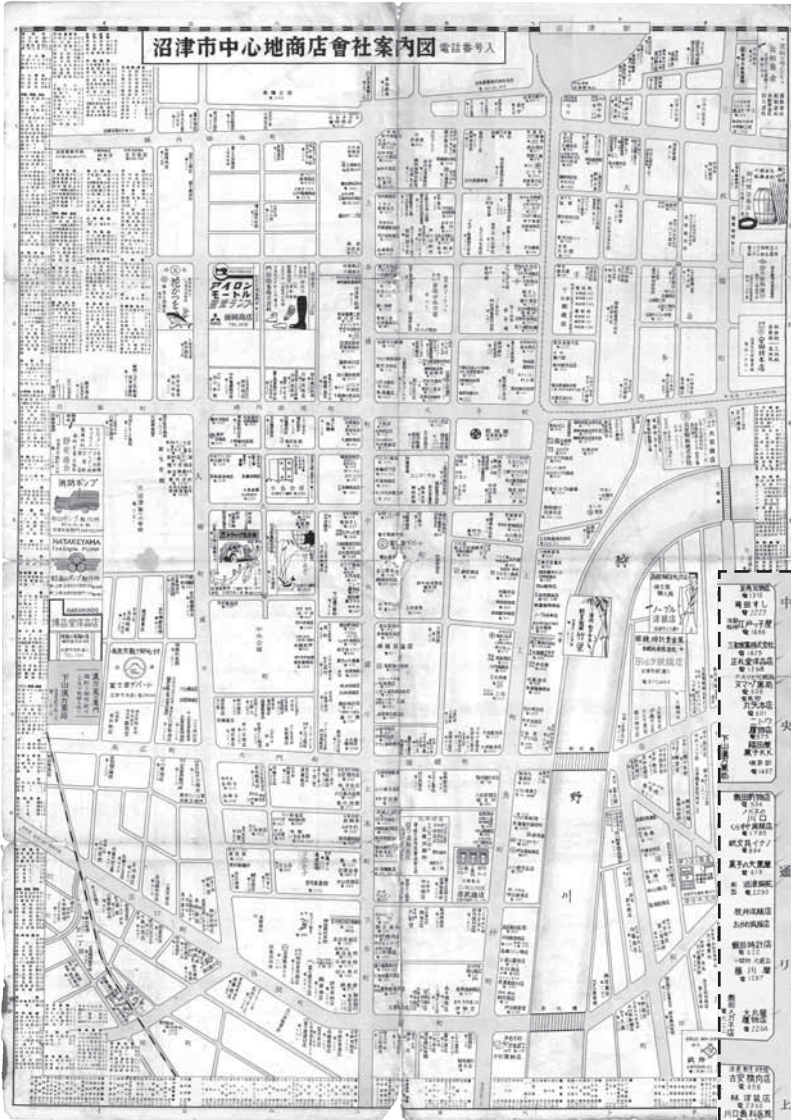


資料館だより

Vol.40 No.3 (通巻208号)

2015.12.25 (年4回発行)



右：「沼津市詳細地図」
 左：「沼津市中心地商店會社案内図」



※点線内は左の地図の一部を拡大したもの



寄贈資料の中から **沼津市詳細地図**

今回は、昭和26年(1951)に沼津市民ニュース社が発行した「沼津市詳細地図」を紹介します。この地図は新聞紙一枚程の大きさで、片面は、沼津市や温泉地で有名な修善寺と伊豆長岡を、各名所の写真とともに案内しています。もう片面は沼津市中心地の拡大図で、地図の中に商店や会社などが電話番号入りで細かく記載され、地図の周囲には業種別の索引がついています。

沼津市中心地の地図から、当時の沼津の様子をみていきます。上端には東海道線沼津駅があり、駅前からは三島行きの路面電車が運行しています。左下隅に見えるのは貨物用の線路です。沼津駅の西側にある食糧公団は戦時中の食糧統制の配給施設です。駅から南へ

向かう通りと地図の中心を縦断する大通りには商店がひしめき合っています。地図中央の通りにある栄屋百貨店は、昭和20年7月の大空襲では焼失を免れ、昭和28年には松菱に代わりました。この建物には、沼津で唯一エレベーターが設置されていました。

狩野川に架かる橋のうち、真ん中にある御成橋のもとには、遊覧船「龍宮丸」の事務所があります。龍宮丸は狩野川から三津や西伊豆へ航行していた屋形船です。船底の一部がガラス張りになっている船もあり、ここから水中を覗くことができました。乗船場所は御成橋付近にありました。また三津からは、伊豆長岡や修善寺方面へ行くことができました。

職人昔語り

車大工 佐藤 柳太郎さん

車をつくる～木工～

本格的な車大工の職人となって、まず覚えなければならないのが、ニグルマ（荷車）、ウシグルマ（荷積牛車）、バリキ（荷積馬車）の3種類の車の組み立てである。ニグルマにはカジボウが付かないだけで、基本的な構造は3種類ともに大きな差はないが、大きさはそれぞれ異なっている。木工の工程では、荷台と車輪に分かれている。

荷台のことは梯子のように組まれていることからハシゴと呼んでいたが、荷台の左右の枠木となるオヤギ、縦棒となるササラ、横棒となるコマを帯鋸（写真1）で切抜き、柄（ホズと呼ぶ職人もいる）で組んでいくことになる。

車軸の位置はオヤギの中央よりも少し後ろに位置する。この車軸の位置が決まるとコマの位置はおのずと決まってくる。図面を引くことはなかったが、全て計算をして頭の中で図面を引いていた。

オヤギにコマの柄を挿し込む穴は垂直にあけるのではなくコマと組み合わせた時に両端のオヤギが3mmぐらい「ハ」の字のように傾くように柄穴をあける。こうすることで重い物を載せても耐えられるようになる。オヤギの穴は角鑿の機械で少し小さめに穴をあけてから、自作の両刃の鑿を使って、挿し込み口は広く、出口はすぼまるように調整し、柄を組んだ時にきっちりとはまるようにする。

ニグルマの場合、オヤギの両方の先端を内側に曲げて手で押すための引手を挿し込む。内側に曲げることを計算して斜めの穴をオヤギにあける。紐を使って締めながらオヤギを曲げる作業は無理をすると折れてしまうので気を遣った。

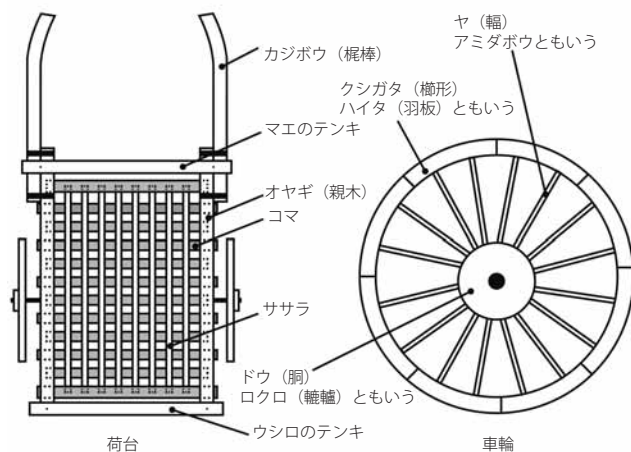


図1：バリキの荷台と車輪の部位名

車輪は、中心のドウとその周囲のヤ・クシガタに分かれる。クシガタ1枚につき、ヤを2本ずつ挿し込むことになる。一番大きな車輪はクシガタが9枚、ヤが18本のもので、直径は3尺（約90cm）ぐらいにもなった。

ヤとクシガタとドウはそれぞれ自転車のスポークとリムとハブになっており、ヤは1本置きに異なる角度でドウに挿し込まれ、クシガタの所でヤの先端の並びが一直線になるのも自転車と似ている。そのため、ドウ・クシガタともに角度をつけて穴をあける。このドウとクシガタにヤの穴をあけ、そして、ドウにヤを挿し込む仕事は父の仕事であった。この仕事は、車大工の中で一番技術を要する部分で、他の車大工がドウへのヤの挿し込みを父の所へ頼みに来ることもあった。

クシガタにはそれぞれの車に合わせた型板があり、板に型板を合わせて墨差して墨を引き、鋸で挽いてクシガタを作った。クシガタは上の弧と下の弧の丸みを同じようにして、中央の幅が広く両端の幅が狭い形にする。こうすることでクシガタを繋げて締めた時に綺麗な円となる。ヤの挿し込まれたドウにクシガタをはめていくと、どうしてもクシガタの下側にわずかな隙間ができてしまう。この隙間を調整するためにスリアワセ（擦り合せ）を行う。スリアワセとは材と材との間を隙間なく密着させるために、この隙間を縦挽きの鋸で挽きなおして両方の材の面を合せていく船大工でも使う技法である。スリアワセはクシガタの柄穴とヤの柄でも行う。スリアワセで使う鋸は、上から見ると少し曲がっている。この方が使いやすかったので叩いて曲げていた。スリアワセをすることで隙間なくクシガタを繋ぐことができ、頑丈な車輪となる。

車輪が完成すると、車輪の回りにはめるワガネ（輪金）を作る。

（話：佐藤柳太郎氏 昭和5年生まれ 沼津市幸町在住）

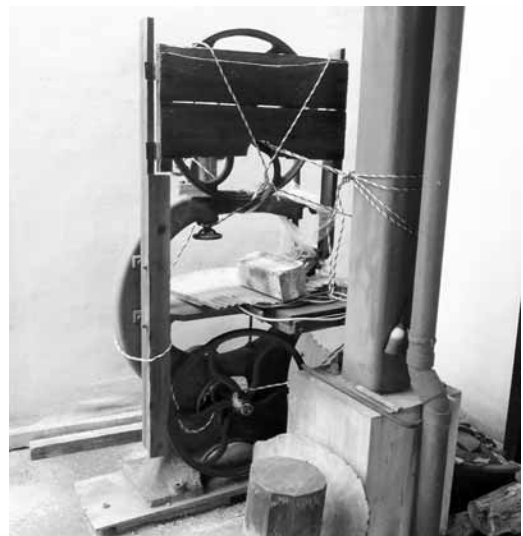


写真1：昭和初期に導入された帯鋸

懐かしの「ドロンオーク」

—原町往年の花形手工業—

はじめに

原は、愛鷹山系の麓に位置し、かつては東海道五十三次の宿場として、独特な経済・文化を形成していた。

明治時代になって宿場が解体されたことにより、他の多くの宿場同様に、新たな現金収入の道が模索され、様々な産業が起こった。原においても製紙をはじめいくつかの試みがなされたが、その後定着した代表的なもののひとつが、「ドロンワーク」である。

「ドロンワーク」とは、古くからヨーロッパ各地に伝わってきた白糸刺繍の基本的なもので、『広辞苑』（岩波書店）によれば、「最も古いレースのひとつで、良質の布地の緯糸と経糸を抜き、その部分の織り糸をかがりながら、様々な模様を作り出していくもので、テーブルクロスやハンカチなどに用いる」という。

明治時代になり、国内の生活が洋風化したり、元来様々な手作業の技をもち、賃金の安かった日本に海外資本が注目したりしたことなどを背景に、「ドロンワーク」が原町でも盛んになっていったと考えられる。

原におけるドロンワークの広まりとその後

明治19年開校の沼津市立原小学校の創立100周年記念誌『原』には、卒業生諸氏の明治時代から昭和40年代にかけての原地域の生活を物語る貴重な体験談が記載されている。この中に大正時代に盛んであった綴方教育について紹介された項目があり、「原町郷土の歌」（大正5年に在籍した児童の「綴方清書帳」より）が登場する。その十番は次のようなものである。

「十 戸数八百六十除 男女や老い若き くるめし人の数々は 六千二百七十四 其の人々の生業は ドロンオークの手工業 製紙漁業に 飴行李 麻糸真田いと多し」

この歌の中では、「ドロンオーク」として記されているが、もともとの英語表記は「drawn-work」であり、「work」の部分英語では「ワーク」と発音すべきところを、当時はおそらくローマ字読みで「オーク」と読んでいたために、「ドロンオーク」という通称になっていたことが推定される。

この記念誌『原』の対談ページには、ドロンワークと同じ意味合いをもつ「ハンケチ」という言葉も断片的に出てくるので、いくつか紹介する。

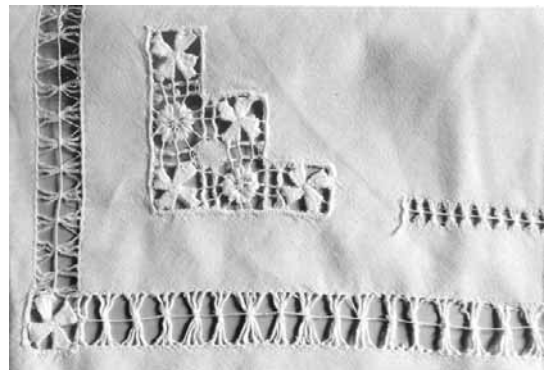
・「学校から帰って来ればね、ハンケチとかヌイトリとか竹行李を編むのですよ。」（明治41年卒業生）

・「小学校の時糸抜き（ハンケチ）をやったんです。放課後家へ帰ると本は風呂敷に包んだまま、ポンとなげて急いでハンケチに行ったものです。」（大正6年卒業生）

・「私は子守専門、女の子はハンケチをやりたくてしようがないけれど、おばさん達がハンケチをやるから、子守させられる訳です。」（大正13年卒業生）

この他にも、男子は糸抜き・女子はかがりといった役割分担があったこと、何軒かのハンケチ加工を営む家があり、月四十七銭の支給事例があったことなどが述べられ、当時は大人だけでなく、小学生もその仕事の一躍を担っていたことがうかがえる。

かつて原町で、ドロンワークの仕事に深く携わっていた宮口唯幸氏宅には、製品のサンプルと得意先に配ったという、店の銘入りの小皿が残されている。



▲きれいな刺繍のあるハンケチのサンプル

宮口氏によれば、何十台かのシンガーミシンを保有し、周辺の製作委託先に道具などを貸し出し、回収した製品をチェック後、国内外に送り出したそうである。



▲「ハンカチ業宮口商店」の銘入りの小皿

原在住の歴史研究家望月宏充氏によれば、太平洋戦争前まで、ドロンワークは地元の主要な家内工業であり、戦後もその美術品的な技術を守り続けた店もあったが、機械化によるカットワークへの移行や産業構造の変容などを背景に姿を消していったようである。

まとめにかえて

浮島沼周辺の地域は、古くからつながりをもっていたが、富士市域の須津でもハンカチ、竹行李が盛んな時期があった。根方街道を經由した原と他地域の交流について、またの機会にふりかえりたいと考えている。

（平成22・23年度本館研究員 内田昌宏）

魚見のある風景① 口野^{いしかづ}烏賊付



(行發堂明紫浦内豆伊) 界の豆駿 (一其) 寺重

上の写真は、内浦重寺の秋山太郎さんから提供していただいた伊豆内浦紫明堂発行の絵葉書の写真です。『伊豆内浦名所絵葉書』の内の一枚と見られるもので、「重寺(其一) 駿豆の界」と題されています。静浦の口野の金桜神社の旧社の山裾にある代官岩付近から内浦重寺方向を望んだもので、右手は淡島です。中央に虎が口を開けたような海蝕洞が写っており、ここが、かつての伊豆国と駿河国の境の「イズクグリ」、まさに「駿豆の界」です。写真で見える限りでは、まだ、ここを道路は通っていないようです。左手の崖裾には石垣が積み、網小屋が建てられています。その上方、太い松の幹が三本立つ根元の手前付近に櫓のようなものが写っています。

右の写真は、その部分を拡大したものです。2本の



柱と3段の横に渡した柵のようなものが確認できます。一番上は屋根かもしれません。見張り番の人の居る所が2層になっているように見えます。

左手前の地先の海は、口野の烏賊付と呼ばれる漁場でした。ここで鮪などを獲る「ハチダ網」の操業経験のある築木秀夫さんにうかがったところでは、ここは烏賊付のホガヨミドで、オオヨミドは代官岩の上方にあったそうです。オオヨミドは魚の群れを見つけるのが仕事で、遠くの海を見ており、網を建ちかける合図をします。ホガヨミドは網の中を見ていて、入った群れの監視や網の絡み、引き寄せの指示をしているそうです。口野には他にも、エーノマエのアンドの天王さんのホガヨミド、オンバの坂田さんの所のホガヨミドがあったそうです。

資料館からのお知らせ

白隠禅画展を開催しました！



本年度も御用邸本邸を主会場として開催された「松籟の宴 2015」の一環として、「白隠禅画展～虫の声、月の光－白隠の祈り～」を10月31日(土)から11月15日(日)までの16日間、2階展示室南側を会場に開催しました。今回は、今まで展示していない12点の作品を展示しました。会期中の14日には資料館協議会も開催しました。

全館の燻蒸を行いました！

11月22日(金)から12月3日(木)までの2日間、館を臨時休館として、関東港業(株)文化財保存対策事業部に委託して、全館と原収蔵庫の燻蒸及び害虫駆除の消毒を実施しました。安全確保のために徹夜での警備が続きました。今後も静浦収蔵庫と隔年で継続実施していく予定です。

沼津市歴史民俗資料館だより

2015.12.25 発行 Vol.40 No.3 (通巻 208号)
編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷 2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436

URL:<http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp